

タンゴ音楽の集い 開催

穴戸 和郎



去る 11 月 25 日火曜日。冬の到来を感じさせる冷たい小雨の中、午後 2 時半より、第 45 回「タンゴ音楽の集い」が銀座ブロッサム ローズの間で開催されました。

巨匠オスバルド・プグリエーセ (Osvaldo Pugliese。ピアニスト、編曲家、1905-1995 年) の初来日から数えて 60 年を記念しての特集です。

当協会理事の飯塚久夫氏のいつもの名調子にのせて、サウンドと映像を交えて立体的にプログラムが進みました。

プグリエーセ楽団は、全ての楽器が楽譜通りに演奏するのが当たり前であった従来のもとは一線を画し、それぞれの楽器が相互に絡んだ精緻な演奏がそのスタイル。また、ルバート※やピアニシモ・フォルテシモの駆使など、緩急自在の演奏の特徴が、年代ごとの変遷をたどりながら解説されました。



会場にいらしていた著名なタンゴ・ピアニスト、小松真知子氏からピアニスト目線でのコメントがあり、プグリエーセのピアノ演奏の特徴を身振り手振りで熱く語られていたのが印象的でした。



小松真知子氏

(当日のプログラムを次頁に添付)

(ししど かずろう：当協会常務理事)

※ 音楽用語で、テンポを自在に加減して表現すること。

<オスバルド・プグリエーセ“初来日60周年”にちなんで>

飯塚 久夫

プグリエーセの源流→フリオ・デ・カロ

1. フリオ・デ・カロからプグリエーセへ (COLORTANGO のレクチャー)

プグリエーセ・スタイルの確立→1950年代前半

2. 二人のために Para Dos (O.Ruggiero) (1952)
3. コリエンテスとエスメラルダ Corrientes y Esmeralda
(F.Praicanico-C.E.Flores) ロベルト・チャネル (1944)
4. 熱情 Pasional (J.Caldara-M.Soto) アルベルト・モラン (1951)

頂点への予感→1950年代後半

5. ラ・ボルドーナ LaBordona (E.Balcarce) (1958)
6. ラ・クンパルシータ La Cumparsita (G.H.MatosRodriguez) (1959)

頂点到達と真髓発揮→1960年代前半

7. チャラムスカ Charamusca (F.Canaro) (フランシスコ・カナロの自演) (1934)
8. チャラムスカ Charamusca (F.Canaro) (1963)
9. 別れ El Adios (M.P.Hurgo-V.San Clemente) (1963)

来日したプグリエーセ→2回目の来日模様

10. 東京国際空港(成田)到着 (1979)
11. 場末 Arrabal (J.Pscual) (1979)

アルベルト・モラン→1980年代も健在

12. あざみ El Abrojo (L.Bernstein-J.F.Blanco)

軍事政権時代の葛藤→“ガルデルの亡命”@Paris

13. ラ・ジュンバ La Yumba (O.Pugliese) (1984)

円熟のプグリエーセ→1980年代後半

14. 心の底から Desde El Alma (R.Melo) (1985)
15. チャカブケアンド Chacabukeando (R.Alvarez) @COLON (1985)

プグリエーセ最終公演→3回目の来日

16. 物語を聞かせて Contame Una Historia (E.Blazquez-M.laquinadi) @名古屋 (1989)

名曲の名唱と名演

17. ロス・マレアードス Los Mareados (J.C.Cobian-E.Cadicamo)
アドリアナ・バレラ (1995)
18. ロス・マレアードス Los Mareados (J.C.Cobian-E.Cadicamo) @Salta (1988)
19. チケ Chique (R.L.Brignolo) @COLON (1985)

